

地域の題材を利用した地歴・公民科の教科指導方法

—中世吾川山荘の調査を事例として—

高知県立高知小津高等学校 教諭 畠中 宏一

1 はじめに

新学習指導要領でも生徒が生きる力を身につけていくために、習得した知識を用いて課題を解決する力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養う必要があることが謳われている。知識の暗記が中心となりがちな地歴・公民科においても、以上のような力を培っていくためには、教材や授業方法の創意工夫が必要である。

生徒が将来自ら学んでいこうとする力を身につけていくためには、純粋に学びたいという気持ちで学習に取り組む経験が必要である。しかし、生徒が主体的に学習に取り組むためには、生徒が関心を持つことができるような教材を作成する必要がある。教科書は生徒にとって必要な知識を伝えていくことができるように編成されているのであるが、その内容が一般的に重要であるだけでなく自分自身とつながりがあるものであることを理解させ、生徒に興味を持たせるための教材はまだ十分開発されていない。

さて、地理歴史科の授業においては、日本及び世界の歴史的形成や地理的特色を学ばせ、公民科の授業においては現代の社会について考えさせていくことが必要なのであるが、生徒の中には現代の社会や日本・世界が自分とつながっていることを十分理解することができず、教科に対する関心を持つことができないことがある。これらの問題を解決していくためには、自らと社会とのつながりについて理解させるのに有効な教材と考えられる、地域を題材として利用した教科指導方法について研究していく必要がある。生きる力を身につけさせることが現代の教育の課題であるというのであれば、地域の成り立ちや課題について学ぶことによって、日本または世界に対する関心を抱かせ、課題を発見して取り組んでいこうとする力を育てていくことが、地歴・公民科の教科としての使命であると思われる。

地域の課題を発見し解決していこうとする気持ちをはぐくんでいくためには地域の成り立ちについて学んでいく必要がある。ところが、高知県では地域のことについて学んでいくための教材はあまり開発されていない。史料に恵まれていないという実情はあるが、既往の研究や少ないながらも存在する史料を活用して教材を開発しようとする試みが少ないことが問題である。そのため、高知県においては地域を題材にした教材の開発方法について研究しておく必要がある。

教材を開発する方法としては、授業で教える内容そのものを研究するやり方と、授業で利用する図などの道具を開発するやり方がある。生徒の主体的な学びを育てていくためには、教科の内容そのものに対する興味を生徒が持つことができるようにしなければならない。そこで、本稿では授業で教える内容そのものを創造していくという意味で、教材開発の方法について研究していきたい。

2 研究の目的

高知県吾川郡いの町に存在した吾川山荘を調査することによって、史料が比較的少ない高知県において地域の歴史を学ぶための教材を作成する方法を研究する。

3 研究内容

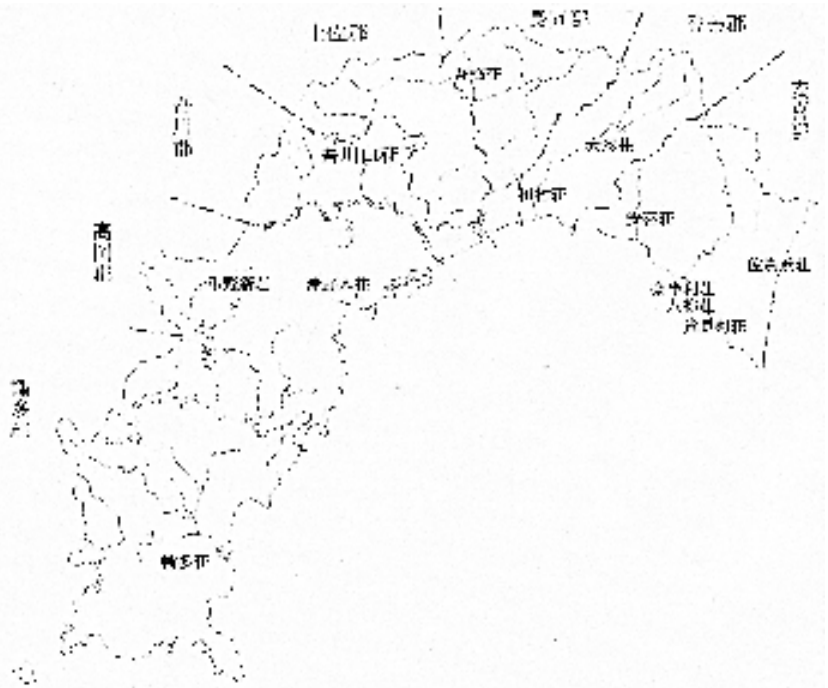
(1) 荘園研究の現状と課題

ア 山間部の荘園

これまでの荘園史の研究では、その成立過程で見られる初期荘園・官省符荘・寄進地系荘園といった諸類型や、畿内型荘園と東国荘園の違いといった地域差については留意しながら進められてきた。本稿で対象とする山間部の荘園を理解していくためには、従来から研究されてきた平野部の荘園との立地の違いに着目して研究していく必要がある。

イ 土佐国の山間部の荘園

土佐の山間部の荘園についての研究は、比較的史料に恵まれている大忍荘を除けばあまり進んでいない。本稿では土佐



第1図 土佐国の荘園 (秋澤 繁 2005 より)

の山間部の荘園の一つである吾川山荘を対象に研究を行なう。従来から研究されている史料の再検討に加えて石造物・棟札などの物質史料や『長宗我部地検帳』などを活用して研究を行ない、高知県の山間部の荘園の特徴をつかんでいく。

(2) 吾川山荘の伝領関係

ア 吾川山荘の成立

吾川山荘は少なくとも1240(仁治元)年までは、国衙留守所の影響下にある造営料所であった。

イ 吾川山荘の発展

吾川山荘は1354(文和3)年に三浦下野守道祐が、春屋妙葩に寄進した。1382(永徳2)年には春屋妙葩が自ら管理する宝幢寺に寄附したが、1384(至徳元)年の時点で、吾川山荘の一部である「桃木谷」は吸江菴の所領となっており、残る「小河村」が宝幢寺領であることが確認されている。

ウ 吾川山荘の解体—国人領への転換—

吾川山荘を含む宝幢寺領は、応仁・文明の乱以降失われたものが多く、吾川山荘も在地勢力に侵食されていったものと思われる。その後、1544(天文13)年には本山氏が東方から進出して、その支配下にあった和田氏が知行していたが、1559(永禄2)年には和田氏が片岡氏によって攻略されることとなったといわれている。このように、吾川山荘の伝領関係については研究が進んでいるが、荘園の内部構造などについてはいまだ解明されていない。

(3) 吾川山荘の領域と荘園を構成する諸地域

ア 吾川山荘の領域の復元

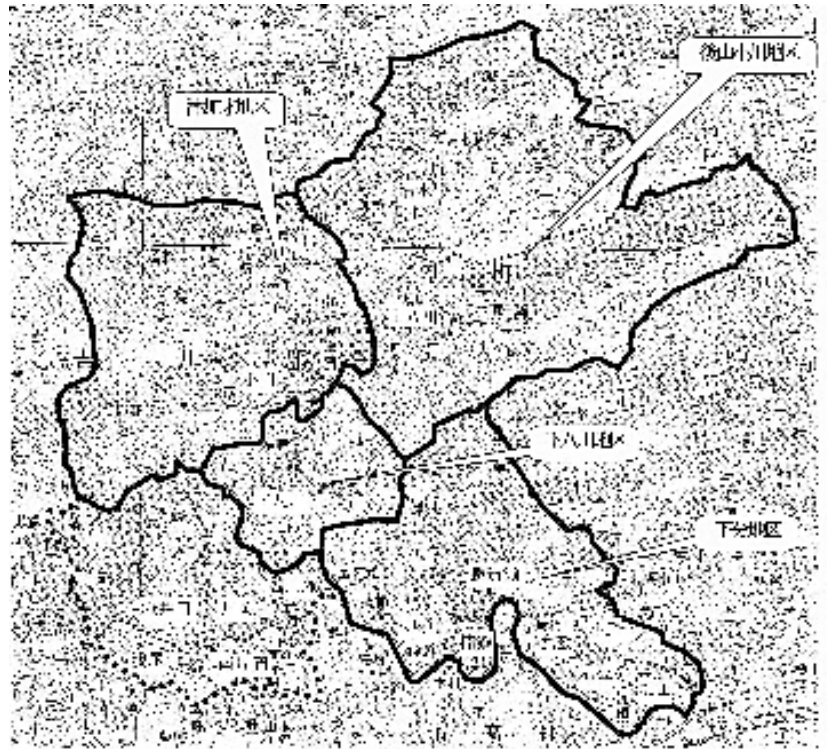
(ア) 吾川山荘の領域

吾川山荘の範囲を、「吸江寺文書」・『鹿王院文書』・「吾川郡神谷村貴船神社棟札」などの史料に見られる「吾川山庄内上谷川村」・「吾川山之内桃木谷」・「吾川山下分神谷村」・「吾河山内小河村」という地名から確認していくと、「吾川山庄内上谷川村」・「吾川山之内桃木谷」・「吾川山下分神谷村」はそれぞれ現在の「いの町上八川」と「いの町小川」の「縦木山」、そして「いの町神谷」に相当する。次に、『長宗我部地検帳』に掲載されている地名から吾川山荘の範囲を確認した。その結果、「吾河山内小河村」は『長宗我部地検帳』の台帳のうち、「土佐国吾河郡後山小川村地検帳」に掲載されている地域全体と、「吾川郡小川村々」に掲載されている地域の一

部が、「吾川山之内桃木谷」は「吾川郡小川村々」の残りの部分と「津加才」に掲載されている地域がそれぞれに概ね相当することを明らかにした。「吾川山下分神谷村」の「下分」については「土州吾川郡下分七名御地検帳」に掲載されている地域にほぼ相当する。以上のことから、吾川山荘の範囲は現在の「いの町清水・上八川・小川・下八川・柳瀬・楠瀬・勝賀瀬・鹿敷・小野・神谷・加田」に該当する。

(イ) 吾川山荘の地域区分

史料に見られる「吾河山内小河村」は現在の「いの町清水・上八川・下八川」に相当する。その内、「いの町清水・上八川」は室町時代の末には和田氏の支配下であったところであるといわれており、「土佐国吾河郡後山小川村地検帳」に掲載されている地域である。「いの町下八川」は和田氏の支配下ではなかったところで、『長宗我部地検帳』の台帳「吾川郡小川村々」の一部に掲載されている地域である。また、史料に見られる「吾川山之内桃木谷」は『長宗我部地検帳』の台帳「吾川郡小川村々」の一部と「津加才」に掲載されている地域であり、現在の「いの町小川」に相当する。そして、



第2図 吾川山荘の領域

史料に見られる「吾川山下分」は「土州吾川郡下分七名御地検帳」に掲載されている地域に相当し、現在の「いの町柳瀬・楠瀬・勝賀瀬・鹿敷・小野・神谷・加田」に該当する。吾川山荘は、以上のように歴史的経緯から4地域に区分することができ、以降本稿では現在の「いの町清水・上八川」に該当する地域を「後山小川地区」、「いの町下八川」に相当する地域を「下八川地区」、「いの町小川」に該当する地域を「津加才地区」、「いの町柳瀬・楠瀬・勝賀瀬・鹿敷・小野・神谷・加田」に該当する地域を「下分地区」と記す。

イ 吾川山荘を構成する諸地域

(ア) 後山小川地区

後山小川地区は上八川(河)村と清水村の2ヶ村によって構成されている。『長宗我部地検帳』によると上八川(河)村は切畑または山畑・山畑(畠)の割合が高い小村が多い。特に屋敷地が密集している小村は、東土み村・土み村である。東土み村は和田氏が支配していた時の拠点で、土み村は片岡氏が進出した後に拠点があったとされる場所である。土み村にあった安養寺跡に残る観音堂の敷地内には、15世紀の五輪塔もみられる。搬入の御影産の花崗岩を石材とする五輪塔が残ることから、この地には吾川山荘の政所があった可能性が強い。上八川川上流には小猿田村・古江村・棚野村・津賀谷村といった屋敷地の筆数が12～16筆の小村がみられるがいずれも切畑の土地利用が多い。『長宗我部地検帳』では棚野村には高雲寺がみられるが、この寺院の跡地には現在大師堂があり、敷地内に14世紀中頃のものを含む五輪塔が残っている。中に

第1表 後山小川地区の小村の土地利用（一部抜粋）

| 番号 | 村名 | 屋敷 | | | 田 | 畠 | 切畑 | 山畑 山畠 | その他 (荒等) |
|----|-----|---------|----------------------------|---------------|------------------------|---------------------|------------------|------------------|---------------------|
| | | 筆数 | 上・中・下 | 山畠・山 | | | | | |
| 7 | 小猿田 | 15 4 | 2町24代 17.3% | 2反11代 1.9% | 3町1反41代 1歩 26.9% | 25代 0.4% | 4町6反40代 39.6% | 6反38代 5.7% | 9反34代 2歩 8.2% |
| 8 | 古江 | 16 1 | 3町30代 1歩 30.3% | 40代 0.8% | 1町5反49代 3歩 15.8% | 2代 0.0% | 3町8反17代 38.0% | 1町4代 10.0% | 5反5代 5.1% |
| 9 | 棚野 | 12 1 | 1町2反33代 14.5% | 35代 0.8% | 2町5反38代 4歩 29.6% | — | 3町6反30代 42.0% | 9反18代 10.7% | 2反5代 2.4% |
| 10 | 津賀谷 | 16 4 | 3町39代 1歩 18.4% | 3反30代 2.2% | 4町4反10代 2歩 26.5% | 10代 0.1% | 6町3反30代 38.1% | 1町8反20代 11.0% | 6反15代 3.8% |
| 14 | 東土み | 10 3 | 2町2反15代 3歩1勺1才 46.2% | 4反4代 8.4% | 1町6反35代 34.6% | 1反14代 4歩 2.7% | — | 1反10代 2.5% | 2反35代 5.6% |
| 20 | 土み | 21 — | 1町6反19代 5歩 81.9% | — | 1反30代 8.0% | — | — | 1反21代 7.1% | 30代 3.0% |

番号は修士論文に掲載した第4図中の番号と共通する。
 筆数の上段は「上ヤシキ」「上ヤシキ」「下ヤシキ」の筆数、下段は「山畠ヤシキ」「山ヤシキ」の筆数を表す。
 その他、枠内の上段は面積、下段は村全体に占める割合を表す。
 面積が「歩・勺・才」まで示されている場合は、上段・中段に分け、前者で「町・反・代」を、後者で「歩・勺・才」を表す。
 小村内で最も割合が高いものは、枠内を強調して表現している。

は搬入品と思われる空風輪も見られ、この地に早くから有力者のもとで集落が発達していた可能性がうかがわれる。

清水村も上八川（河）村と同じく切畑または山畑・山畑（畠）の割合が高い小村が多い。中ノスク村は屋敷地の筆数も多く、近くにある八坂神社には明徳3年銘棟札が残っており、清水村の中心集落として栄えていたことがうかがえる。川窪川流域の白井谷村・川窪村・巻川村は、いずれも現在は住宅の戸数が多くないが、『長宗我部地検帳』に記載された屋敷地の筆数は比較的多く、山間部に立地する生業が盛んであった様子がうかがわれる。

(イ) 下八川地区

下八川地区の小村は河川から比高差がある高い場所に集落が立地している。打木村・横野村・十田村は下八川地区の中でも標高が高い位置に立地する小村であるが、これらの小村に屋敷地が特に多いことから、切畑・山畑（畠）における生産が主要な生業だった様子をうかがうことができる。

(ウ) 津加才地区

土地利用をみると他の地区と同様切畑や山畑（畠）の割合が高い。新別村・柳野村・太野村等は屋敷地の筆数が多く、上八川（河）村と池川を結ぶ幹線に集落が発達した可能性が考えられる。幹線から離れた山間部にも屋敷地の筆数が10筆以上を数える小村が7ヶ村あったが、ほと

んどが切畑における生産を主な生業とする小村であった。

(エ) 下分地区

仁淀川本流左岸の7ヶ村によって構成されている。土地利用は切畑が多いが、勝賀瀬氏の拠点があった神谷村は水田の割合が高い。しかし、屋敷地の筆数は切畑の割合が高い小村の方が多い傾向にある。また、全体的に荒れ地となった耕地が多く、検地が実施される前に洪水などの天災、または戦乱などの影響を受けた可能性がある。

(4) 吾川山荘の人々の生活と生業

ア 主要な集落と生業

後山小川地区で14世紀に製造された五輪塔が残る大師堂がある棚野村、16世紀末に同地区で最も集落が発達していた土み村、「吾川山之内桃木谷」として吸江庵に寄進された津加才地区の中心であった奥大野村について、『長宗我部地検帳』を参考にして分析を行ない、吾川山荘の実態と特質をより具体的に提示する。

(ア) 棚野村

棚野村に所領を有する者のうち、藤五良と新尉は後山小川地区以外に所領を持っておらず、両者は片岡氏が進出する前から棚野村を拠点としていた人物であると思われる。藤五良の主要な耕地は切畑であり、屋敷地の北方の高地と西河村に切畑などを所有している。片岡氏進出前からこの地を拠点としていた有力者が、切畑における農業を主要な生業としていた可能性が強い。

(イ) 土み村

土み村は旧吾川山荘の領域の中では最も屋敷地が密集する。土み村に所領を有する15名の内13名は後山小川地区以外にも所領を持っており、片岡氏の配下の者で後山小川地区に進出した時に新たに所領を獲得したものであると思われる。片岡氏が進出する前から土み村を拠点としていた人物であると思われるのは主馬允と清左衛門である。主馬允は集落内に中ヤシキ・下ヤシキを持っていた。

(ウ) 奥大野村

奥大野村で津加才地区のみに所領を持っているのが河内と鴨兵衛である。河内は奥大野村・須山村・中峯村に7ヶ所の屋敷地を有し、花木村に約13町記載されている土地の約9割を所有している。そのほとんどは切畑や山畑である。検地を実施した時点でも広範囲の土地に関する権利を有する、有力な在地勢力が存在したことをうかがうことができる。

(エ) 小村に残る在地勢力と生業

奥大野村の河内は広い切畑・山畑を所有していたが、片岡氏進出前の在地勢力は他の地域でも同じような状況であった可能性が強い。これらの在地勢力は15世紀後半以降の吾川山荘の解体期に自立を強めていったと思われるが、その経済的基盤であったのが切畑・山畑であると思われる。

後山小川地区の小村である棚野村・土み村の有力者の所領を比較すると、棚野村の藤五良の所領は土み村の主馬允の所領に比べて広い。これは、藤五良と主馬允の持つ勢力の違いによるものではなく、棚野村と土み村に拠点を持つ有力者が営む生業の違いによるものであると思われる。藤五良は切畑における生産を主要な生業としていたために切畑を多く所有していたのに対して、主馬允の方は切畑にあまり依存していなかったからだと思われる。土み村は背後の山との距離が近く焼畑に適した土地を近くに求めることが難しいが、川の方岐点であるため交通の要所として発達しやすい。この立地を利用して主馬允が流通に関する仕事を営んでいた可能性が考えられる。石造物の年代から、15～16世紀に土み村が商業の発達によって台頭することになったと思われる。

流通していた生産物では森林資源が主要なものであったと考えられる。かつて小村神社の造

営料所であったこの地域で林業が発達していたことは十分考えられる。近世の史料でもこの地域に関する森林資源の記述がみられる。また、茶・楮など工芸作物の生産も行われていた可能性も十分考えられる。

イ 土佐国の山間部の荘園と生業

土佐国の山間部の荘園における生産物としては材木が代表的なものとして知られてきた。茶・楮など山の産物の生産についても大忍荘・津野荘に関する史料に記されている。これらの史料は一部の荘園に関するものであるが、土佐国の山間部の荘園の多くに共通する可能性が高い。

(5) 地域の題材を利用した教材の作成方法と効果の検証

吾川山荘は実態を知る上で必要な史料に恵まれているわけではないが、従来から研究されてきた史料を検討するだけでなく、『長宗我部地検帳』や石造物などの史料を活用して集落の規模や生業について把握していくことができた。高知県の山間部の荘園は、吾川山荘と同様に史料が乏しい荘園は多い。しかし、『長宗我部地検帳』によって高知県全体の土地利用や荘園に所在する集落の規模や営まれている生業についてある程度知ることができ、物質史料を活用すれば地域の集落が形成された時期や他地域との交流について調査することができる。

次に、調査した題材を利用して教材を作成する方法について考える。生徒が地域の歴史に興味を持つように指導していくためには、当時の地域の重要性を伝え、生徒の知的好奇心を満足させるような教材を作成する必要がある。吾川山荘については、今回の調査で、荘園が林業によって発達していたことや、室町時代までには集落が形成されて畿内との交流が行われていたことが確認されており、これらのことを題材にして生徒に学びの喜びを与えることができる教材を作成することができる。本研究では、山間部の荘園が林業によって発展して、外部からの物流も発達していたことを理解させ、地域の文化財によってこのような事実を知ることができるという驚きを生徒に与えることを目的として表1の学習指導案を作成した。そして、吾川山荘が所在した場所にある高知県立高知追手前高等学校吾北分校で研究授業を実施して、地域の題材を利用した教材による教育効果について検証した。授業実施前後に行ったアンケートの結果では、自分が暮らしている市町村の歴史について、今まで知らなかった事を新たに知ることによって、より興味を深めていった様子をうかがうことができた。

第2表 学習指導案「吾北の歴史」

| 校時 | 過程 | 学習内容 | 生徒の学習活動 ((学)以下に記述) と 授業者の教授活動 ((教)以下に記述) |
|------------|----|---------------------------|--|
| 1 | 導入 | 郷土の歴史の調べ方 | (学)歴史にはどのような調査方法があるか考えて答える。 |
| | 展開 | 考古学資料によってわかる吾北の歴史 | (教)地域内では最古となる弥生時代の遺跡をパワーポイントで説明する。 |
| 吾川山荘と吾北の寺院 | 展開 | 身近にある文化財(五輪塔)によってわかる吾北の歴史 | (教)パワーポイントで五輪塔について説明する。 (学)制作年代の異なる五輪塔の写真を3枚見て、年代順を理由も含めて考え、班ごとに発表する。 (学)年代が新しくなると五輪塔の形がどのように変化するのか、班ごとに考えて発表する。 (教)地域にある五輪塔をパワーポイントで説明して、その年代を考えて答えるよう指導し、五輪塔の年代や石材について説明する。五輪塔の石材の中には畿内の御影産の花崗岩があることを説明し、なぜそのような搬入の石材によってつくられた五輪塔があるのかを考えさせる。 |

| | | |
|-------------|-----------------------|---|
| | | また、南北朝時代につくられたと考えられる五輪塔があることを確認し、吾川山荘の集落がその時代まで遡ることができることを説明する。 |
| | 『長宗我部地検帳』によってわかる吾北の歴史 | (教)『長宗我部地検帳』に記されている寺院をパワーポイントで説明する。 (学)五輪塔が所在する場所にあった寺院を考えて答える。 |
| | 荘園に関する文書によってわかる吾北の歴史 | (学)吾川山荘に関する文書史料について説明を聞き、わかったことを考えて答える。 (教)吾川山荘が木材の産地として重要であったことを特に理解させ、室町時代は寺院の支配下にあったことも理解させる。 |
| ま と め | 本時の復習 | (学)歴史の調査方法と、それによってわかった吾北の歴史について理解する。 |

6 まとめ

今回の研究では具体的には日本史において地域を題材にした教材を開発する方法を提示したのであるが、生きる力を育んでいくためには地歴・公民科のあらゆる科目で地域を題材にした教材を開発していく必要がある。そのためには、教員が教科書の内容をそのまま教えるのではなく、常に生徒が興味を持つことができ、教科で学ぶべき重要なことを理解しやすい教材を開発する必要がある。

引用・参考文献

- 秋澤 繁 2005 「土佐国」『講座日本荘園史 10 四国・九州地方の荘園』吉川弘文館
- 神木哲男 1980 「在地経済の発展と貨幣—土佐国大忍荘—」『日本中世商業流通論』有斐閣
- 小林一岳編 2001 『山間村落における交流の総合的研究—景観・文献・信仰・石造物からの歴史的復元—』明星大学一般教育
- 高橋 修 1988 「中世前期の公事と村落—近江国葛川の場合—」『地方史研究 216 第 38 卷 6 号』地方史研究会
- 高橋一樹 2010 「中世権門寺社の材木調達にみる技術の社会的配置—中世前期を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告第 157 集 [協同研究]中・近世における生業と技術・呪術信仰』国立歴史民俗博物館
- 福岡彰徳 1983・1984 「三浦道祐寄進状案について(1)(2)—吸江寺文書文和三年—」『土佐史談 第 163・165 号』土佐史談会
- 藤井豊久 1978 「中世山村の形成と荘園領主支配について—近江国明王院領葛川を素材にして—」『地方史研究 152 第 28 卷 2 号』地方史研究会
- 山下知之 1990 「中世阿波国における広域所領の展開—長講堂領那賀山荘を素材に—」『徳島地方史研究会創立 20 周年記念論集』徳島地方史研究会創立 20 周年記念論集刊行委員会
- 鹿王院文書研究会編 2000 『鹿王院文書の研究』思文閣出版